とは、名目を正して議論を爲すを主義とすれば、方今西洋に於ける論理學者に類すべきものなれども、ろの發達の正路に由らざりを爲め、邪徑に陷りて、遂に種々の詭辯を逞ふするに至れり、但を此流は皆學者にして、蘇秦張儀の如き野心ある者とは大に其趣を異にし頗る理窟を研究したる者なり、然れどもろの理窟と云ふも、大抵似而非なる者なれば、之を詭辯家と謂ふて適當なるべし、西洋に在りても、詭辯の術が曾て昔時に行はれしことあり、東西の詭辯、頗る相類する者あり、又相類せざる者あり、ろの比較は姑らく置き、請ふ此れより直ちに本題に入りて、その歷史の概略を演述せん、（未完）

竹取物語（承前）

白河次郎

山鳥の尾の長〳〵しき文章とはなりぬ斯の如き閑文字にて貴重なる本誌を汚さむもいかゞはしければ、なるべく要を摘み本号にて完結せしむべし

竹取物語と支那文學

竹取物語を取りて、漢語より來り、我國のふしに直して用ゐられたる言葉を數へたるに、總て五十餘語あり。即ち下の如し。

三寸　悵　猛　文（ふみ）　願（ぐわん）　佛（ほとけ浮屠家の轉用？）　例　唱歌（そうか）　蓬萊
五色（ごしき）　百千万里　賓頭盧（びんづる）　十六ろ（窓？所？倉？竈？）　優曇華（うどんげ）
掾　鬼（陰の轉か）　瑠璃　大願　千餘日　祿　要　けこ（下工？家子？）　一生
ちょうせさせ（打？懲？）　長者　五十両　質　金青（ぢんじょう）　仮粧　請（しょう）
錢（せに）　繪（ゑ）　南海　反吐（へど）　害　興　二十人　對面（たいめ）　奏

御覽　百官　優　制　切（せち）　氣色（けしき）　六衛　帶　勅使　番　王　羅蓋（らがい）　裝束
不死　本意（ほい）　天　貝　功德

抑も外國語の國語に入るや『物名よりし動詞形容詞も言ひ慣ゐたるは終に此國の語となゐぞもそゑ皆一度名詞となりてそれにすとかたりとか云ふ文字を添えて働かす』ものなり云ふ。以上の引例の中、名詞其大部を占め、動詞尤とも少なきは、蓋し此が爲なるべき。

支那文學が我國思想の上に及ぼゑゝ影響は、左迄著しらざりしは、既に前に述べつ。されどさすがに古くより行はれ、彼國と交通れ盛なるよつれて、漢籍いよ〳〵勢を得、詔勅なり、史書なり、詩賦あり、はては日記私錄に至る迄、漢ぶりの文体を用ゐるもの多きに至りたれば、支那文學の我文學に及ぼしたる感化は、形式上に於て、頗ぶる著しかゐしなり。

されば文体句調等にも、例令ば『國王の仰事をまさに世に住み給はん人云々』とか、或は『翁は泣き歎く能はぬことなり』などの如き、宛も漢文直譯を讀むが如き、若は漢文奪胎の文を見るが如き心地ゐるもの、いと少からん見ゆ。

竹物取語と美辭學

眞理は一なり、豈古今あらんや、豈又洋れ東西あらんや。たとへ美辭學てふ學問なき國にありても、若は又、なき古に遡りても、文學上の妙趣ある著作は、なぞ美辭學の規則を逃るべきや。

美辭學上、人の嗜好に應ずるもの三。曰く崇高、曰く優美、曰く可笑。崇高は壯大、雄偉、森嚴、凄慘、冥蒙よりして起り、優美は原と靜平温和あるより起れども、凡そ其文趣其觀る所のものと直に和親合同するによりて然るものあり。可笑に至りては、適宜を失して危險なきと、驚怪の念起りて、惡感之に伴

はざるによるなり。竹取物語には可笑最とも多く、優美之に次ぎ、崇高又之に次ぐ。彼の赫哉姫を以て優美崇高の感を起さしめ、天地神明の怪力を出して更に崇高なふしめ、更に之を圍繞せる衆多の人物、繁雜なる事態をして悉く可笑輕妙の風を帶ばしむ。今其一二の例を擧げん。

『いりゞしけん、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてあつかく。いづ方の方ともしらず、船を海中にまかり入りぬべく吹きまわして、浪は船に打ちかけつゝ捲き入れ、神は落ちかゝるやうに、ひらめきかゝるに云々』

何等の崇高ぞ。

『この兒養ふほどに、かたち清らなること世になく、家の内は暗き所なく、光滿ちたり』

或は

『立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず、飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。ろの中に王とればしき人、家に造麿ようで來と云ふに、猛く思ひつる造麿も、物に醉ひたる心地して、うちぶしに伏せり』

或は又

『中將取りつれば、ふと天の羽衣打ち着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと、おぼしつることも失せぬ。こと衣着つる人は、物もなくなりにければ、車に乘りて、百人許天人具ゐて昇りぬ』

何ぞ其崇高にして而も優美なるや。

『その山のろとつらを廻れば、世の中になき花の木ども立てり。金銀瑠璃色の水流れ出でたり。それにはいろ〳〵の玉の橋わたせり。ろのあたり照り輝く木どもたてり』

何ぞ其優美なるや。

『面白きことをば、はちをすつとはいひける』『言の葉を飾れる玉の枝よぞありゝる』或は『是をなんたまさかなるとは云ひ始めける』又は『れもひに燒けぬかゝころも』『大伴の大納言は龍の玉や取りておはしたる。否さもあらず。御眼二つに李のようなる玉をぞ添へていましたる』

などの如き、輕妙可笑なる布置の如何に巧なりしことよ。

又其文辭の修飾には、「明比」(シミリー)「暗比」(メタフホル)若は「寓言」(アレゴリー)に富みたる、「寫聲」(ヲノコトポエー)に巧なる、「對照」(アンチフエシス)「警語」(エピグラム)に妙なる、文勢の「漸層」(クライマックス)なるが如き、我は必しも取り出でゝ云はず。

其文体の素撲にして冷却ならず、淡泊にして乾燥ならず、簡約にして無趣ならず、單純にして單調ならず、文雅にして華麗ならず、而も雄健なる文辭に富むが如き、人の宜しく倣ふべきものにして、しかも摸倣に難き所ならむか。されば日本文學史には此物語を評して次の如く言へり。

『其文章は通常の物語文の優美にのゝ長じて氣力なきに似ず少しく遒強なるを見る文法簡潔素撲にゑて稍古文ょ似て蒼然古色を帶ぶと雖も其思慕怨恨を寫せる處は委曲緻密の筆を用ゐて毫も遺憾なからしめ、恰も莊子を讀むが如き感あらしむ但しこゝはかゝの如く艱澁ならざるにより其古きに似ず却て解し易し』

竹取物語の特色

竹取物語の特色は、平安朝腐敗の空氣に蝕せられざりしにあり。其特色は優に美辭學上の妙趣ょ符合せるにあり。其特色は篇中の人物の、悉く特質を備へたるにあり。平安朝出色の文字なると、美辭學上

の妙趣あるとは、くだ〳〵しく既に述べつ。我は今篇中の人物を觀察せむか。

總て美術上に製作物は、皆深意あるを要す。深意とは、あらはに勸善懲惡を唱へ出すにあらずして、高妙優美純潔の思想を以て、之を文筆の間に現はし、月を看るがごと、花を看るがごと、知らず〳〵人をして高妙優美純潔ならしめざるべからず。斯の如く之を文辭の上に現れしめむには、其主人公をして、高妙優美純潔の人を撰ばざるべからざるなり。かるがゆゑに古往今來の理想小説には、大概純善純美純眞の齊一を保てる人物を捕へ來りて、以て理想的人物を畫き、以て其理想の標準を寫すものなり。然れども純善純美純眞の齊一を保てる人物も、未だ之を世界に望むべからず。必らずや之を塵世以外に迎へざるべからず。竹取物語の作者は、其主人公を何ゑの地に迎へ、又此に如何ばかりの特質をか有せしめたる。

若し夫ゑ氣澄み風清く、半夜人定まるの後、出でゝ野外を徘徊すれば、寥々たる天地の内、玉輪獨ゑ照り渡り、長空清うして水の如く、清光万里、恰かも是れ『九州悉在天光裏、萬象都歸月影中』此時に當りて、胸中一點の汚濁あゑや如何に。塵の浮世を脱却して、濁りなき神の御國に入りたるの心地やすべき。月は高妙なり、月は洵に純善なる實体ならずや。一輪の皎潔は、能く千里の嬋姸を致し、天は爲めに高く、水は爲めに澄み、氣は靜かに、風も清く『寒光搖海碧、夾氣挾天青』を見れば、誰か月を稱して純美と云ふを尤めんや。抑も亦た、一輪の明月、靜夜高く出で、山明かに岸白く、瑩光は歴樹茅屋の内を照し、更に纖翳の清光を隔つるなきが如きは、何ぞ其純潔よして純眞なるや。月は洵に高妙優美純潔の實躰なり。月は洵に純善純美純眞の齊一を保てるものなゑ。月なるかな、月なるかな。月は大陰の精と聞く。そが中には、廣寒宮や立てるなふん。ろが宮よは、嫦娥とやらむは住み給ふらん。竹取物

語の作者と、月光皎潔たる「インスピレーション」を受けて、赫哉姫をば月界より迎へ來たなり。されば赫哉姫は宛も月の如きなり、塵世れものにはあらず、優に眞善美の齊一を保ちて、敢て塵寰れ侵す所とならざりしなり。更に月の如く、千万人の人の心を樂しませども、敢て一人の私する所とはならざりたなり。偶々之を得たりとするものは、猿猴水を掬して、月を得たりとなせと一般、其得たりとなすものは月の映像なりしなり。

竹取の翁の正直よして無邪氣なる、石作皇子の『心のしたくみある』車持の皇子の『心たはりある』、財豐に家廣き阿部の御主人の愚なる、大伴御行の怯弱なる、石上麿の熱情盛にして智謀足らざる、皆悉く一種の特質を備へ、潑々として篇中に躍如せるを覺ゆ。

結論

我自から揣らず、猥りに我文學史上の至寶を論ひぬ。甚繁肯を得さりしや、固より自から之を知る。而も敢て之を爲る所以のものは、近年歴史輪切躰なるもの頻りに行はれ、未だ文學史の輪切躰なるものなきを怪しめばなり。間々文學者を捉へ來りて論ふものあれど、或時代の文學の中心たるべき好著述を、捉ふるものなきを悲しめばなり。我微衷は洵に此に存する。更に終に臨み、一言以て此ながくしき數章の文意を閉づ。曰く竹取物語の作者と、宛然英のアヂソンか。

（完結）

天下の數勢遂に三に歸せんか

安東俊明

古に鼎あり、其足三、徒に之を看過すれば事体固より輕々たるのみ、然れども天下遂に所謂鼎足の勢なるものあるは何ぞや、易に天地人あり、所謂宇宙の三極にして、天下の能事蓋し是より出づ、人生